永井 優里
NAGAI Yuri

陶芸表現における作家と土の関係性に関する一考察
作品「skin99.5」及び研究報告書

A Consideration about the relationship between artist and clay in Ceramic Art.
Work “skin99.5” with research report

工芸領域

Skin99.5
各 250×300×250 mm、全体のサイズ可変、5 個組
陶
2024 年

序論

筆者が陶という素材を用いて制作しているとき、まるで土に自我があるように感じることがあり、いつも自身と陶という素材の間に何かしらの特別な関係性が芽生えているような感覚がある。この土から得る感覚を多摩美術大学工芸学科の教授である尹熙倉は “粘土が作り手の身体や感覚に働きかける本質的な力” としている。筆者はここから以下の二つの疑問を持った。第一の疑問は、この “粘土が作り手の身体に働きかける本質的な力” を、他の作家がどのように受け取り、土と関わっているのかということである。第二の疑問は、陶芸作品の制作工程は作家によってさまざまであるが、制作工程が他の作家と同一であったら、この力との関わり方は同一であるのか、また違うものになるのかというものである。そして、その工程ごとにこの力にも傾向があるのかというものである。筆者が主に行っている特徴的な制作工程は、てびねり技法による成形と、黒陶という焼成技法の二つである。本研究では、陶芸表現における作家と土の関係性について、筆者の制作における二つの制作工程を軸として二つの疑問を明らかにし、自身の陶による造形表現についてより深く考察することを目的とし、執筆した。

第 1 章　現代陶芸における作家と土の関係性

本章では、第一の疑問である、“粘土が作り手の身体や感覚に働きかける本質的な力” とは何かというものについて、工芸評論家の外舘和子と金子賢治の論述を踏まえて現代陶芸という分野からの観点で論考した。この疑問の一考察として、いずれの評論家も工芸で行われる表現は、素材と、その素材が作家に与える造形プロセスとの関わりによって成立する表現であるとした。ここから、現代陶芸の観点において、土と作家の関係性は制作するにあたって必須となる要素であり、作家が土と独自の関係性を獲得したときに表現になると考えられた。“粘土が作り手の身体や感覚に働きかける本質的な力” を受け取った作家は粘土という素材と相互に関わり、その関わった結果を形として示し、作品にすることが現代陶芸での表現であると考えられた。

第 2 章　作家と土の関係性についての実際

本章は序論で示した筆者の第一の疑問を、筆者が行っている手びねり技法と黒陶という技法を軸として、実際に中島晴美、八木一夫、橋本知成を通じて論述した。特に手びねり技法においては、土の可塑性という点を加えて考察した。中島晴美は中島と土の可塑性との関係性について。八木一夫は、八木と黒陶の関係性について。橋本知成は、橋本と土の可塑性との関係性と、黒陶の関係性についての両方について、それぞれの作家がどのように土と関わり、それを作品としているかについて言及した。

第 3 章　各作家の土との関係性の比較考察

本章では、第 2 章で取り上げた作家を、制作工程を基準として、作家同士を比較考察をした。これは第二の疑問の、制作工程が他の作家と同一であったら、この力の受け取り方、関わり方は同一であるのか、また違うものになるのか。そして、その工程ごとに “粘土が作り手の身体や感覚に働きかける本質的な力” にも傾向があるのかということに対しての考察である。作家の中島晴美と橋本知成を比較した結果、土の可塑性からくる関係性は、人間の内面を制作に反映する傾向があると推察できた。しかし橋本は可塑性に自己を見出しており、中島は他者を見出しているため、両者の土との関わり方は完全に一致しないことが言えた。また八木一夫と橋本知成を比較した結果、黒陶と作家の関係性では、あくまでもこの焼成技法で制作する作家はかたちをそのまま残し、表面上での変化だけを受容していることが分かった。八木も橋本も、どちらも胎土を焼成することによって生まれる偶然性を排除し、成形段階の状態を残すことが重要であった。しかし、八木は、黒陶の表面的な印象を自身の造形に紐付けて作品に昇華している。橋本は黒陶を一つの造形プロセス、行為として昇華していることが 2 人の同一性ではないことが明らかになった。ここから、この疑問の一つの解として、制作工程が同一でも、この力との関わり方は同一ではない部分もあることが明らかとなった。

第 4 章　修了制作報告書　作品《skin99.5》

本章では、筆者が今まで制作してきた作品の制作プロセスとその作品を作るに至った経緯を踏まえた上で、本研究で取り上げた土と作家の関係性に着目し、筆者の修了作品「skin99.5」の作品制作報告を行なった。今回の「skin99.5」において、筆者は手びねり技法と黒陶に重きを置いた陶造形プロセスから感じた土との関係を表出させることを目的とし、制作を行なった。

結論

本研究では、普段筆者が制作しているうえで行なっている手びねり技法と黒陶の二つを軸として、第一の疑問である “粘土が作り手の身体に働きかける本質的な力” を、他の作家がどのように受け取り、土と関わっているのか。第二の疑問である、陶芸作品の制作工程が他の作家と同一であったら、この力との関わり方は同一であるのか、また違うものになるのかという疑問に対して考察を行なった結果、土の特性と黒陶が作り手の身体や感覚に働きかける本質的な力となり、制作工程による違いは作家独自の土との向かい合い方としての形態であり、陶による造形だから可能な独自表現となり、そのことが陶による表現と造形の魅力であると結論づけた。